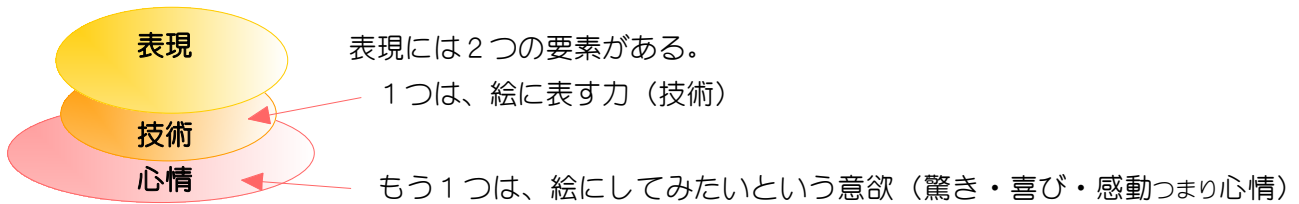


図画工作教育講座8 《 読書感想画 》



心情だけでは、絵にならない。しかし、心情（伝えたいこと）がなければ絵（表現）を描く意味がない。

技術だけで、絵は描ける。しかし、心情（伝えたいこと）がなければ絵（表現）としての意味がない。

表現の基盤は、「このことを伝えたい」という子どもの思い（心情）

技術は、それを支える手段。

手段を目的化するから、本物そっくりに描く写実力だけを重視してしまう。

小学校の図画工作は、絵描きの卵を育てることではない。

自分の思いを絵に描くことは楽しいな、面白いなという「**絵心**」を育てることである。

6年国語教材「やまなし」で、子どもの思いを絵にする試み

なぜ「やまなし」なのか？ 教材にする5つの理由

① 国語で「心情」を十分に深めているから。

小学校の担任のメリット→国語を図工に活かす。

他にも*大きなかぶ *笠地蔵 *モチモチの木 *よだかの星などの教材がある。

他教科でも子どもの意欲が高まる素材は多い。

*音楽→初めてのリコーダー *理科→初めて使う実験器具

*体育→今、クラスのみんが熱中している競技etc

② 色と形に関する文章表現が多彩だから

③ 自由に発想できる素材→クラムボン

④ 教科書（光村図書）の挿し絵が抽象的で表現への影響が少ないから

そして、重要なのは

⑥ **自信** 6年生のこの時期は表現への自信をなくしがち。

新しい技法を紹介して、興味関心を高める。

1 全体計画を提示する

製作の手順が分かると → 子どもなりに見通しが持てる。

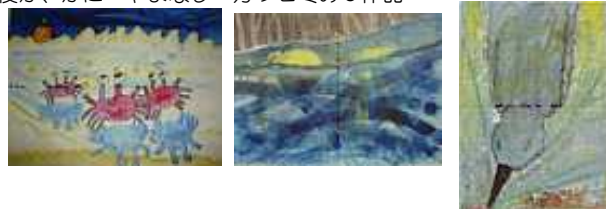
→ 進み具合を自己調節できる。

※教師だけが分かっていると → 子どもは先の手順が分からないので、教師の指示を待って行動しなければならない。指示待ち人間をつくることになる。

2 参考作品を見る

この場合は主役が、かに・やまなし・カワセミの3作品

複数作品を提示→多様な表現の中から、
自分に合うものを選択して参考に。



上手すぎるプロの作品は「こんなの無理」と逆効果になってしまう。

※上手な絵づくりが目的ではない。これなら自分にもできるという安心感を優先する。

3 場面を決める 主役の決定

かにの親子 やまなしの実 カワセミ
想定外の主役を考え出す子がいるかも。



4 川を描く

ローラーで川を描く（筆を使わない意外性で、子どもたちの興味と意欲を刺激する）

質問なぜ主役を後回しにして背景を先に？主題から描き始めないと集中力がなくなるのでは？

回答ステップ化して毎回新しい描画材料に変わるので 集中力は持続可能

背景を先に描けば、画面の雰囲気分かるので 教師も子どもも先の見通しが持ちやすい
6年生の図工は50時間しかないので 背景を先に描けば時間短縮ができる

5 かにの親子を描く

描写力に自信がなくても、表現を楽しむ3つの手立てを紹介して選択させる。

- ①図鑑を見ながら描く（模写）
- ②別紙に描いて切り抜いて貼る（コラージュ）
- ③写真を切り抜いて貼る（フォトモンタージュ）



6 色ぬき

かにの部分、水筆で絵の具を溶かしてちり紙で吸い取って色ぬきしてから着色する。

※絵の具は、足し算だけでなく引き算（色抜き）もあり。

※加筆は、白を加えると発色がよくなる。

7 山梨・花片・月光or日光・泡・クラムボンetc

絵筆を使わない表現方法を知らせて、表現の幅を広げる。

月→筆（大きさ・位置の検討→造形の能力）

空→筆（黒を使わない夜空→概念崩し & 汚れ防止）



歯ブラシに絵の具を付けて、割り箸ではじくと、月光のキラキラが。



スポンジに絵の具を付けて、はんこみたいに押せば、クラムボンが。

8 岸&林を描く

岸→パターン化（右岸or左岸）を例示→選択力を。

草は重色の技法で。

林→直接筆で描く（輪郭線のない表現）



花びらを切り抜いた紙とローラーで、川面を流れる桜の花が。

冬の樹木は根元から枝先へ描き進める。

9 題名を考える 自分の仕事を振り返る場
振り返ることが自分を伸ばす



子どもの自己評価（分量はできるだけ少なく）

※ 読書好きにするのは難しいが、読書嫌いにするのは簡単。

読書後に必ず原稿用紙2枚以上の感想文を義務化すれば
確実に読書が嫌になる。

図工の自己評価も量を増やせば逆効果になる。量よりも質が大事。

㊦「兄弟であわくらべ」
㊧「待って～やまなしさん」
㊨の絵はローラーを使った白抜きです。

レポート 宮沢賢治作やまなしを読んで、感想を絵で表す。



* この講座では、たくさんの指導法や製作技法について学んだが、その全ての根底に流れていたのは、「図工を楽しもう」という考え方であるように感じる。どうしても製作技術には差があるし、誰もが画家として生きていけるわけではない。その中で図工の持つ役割とは、「自分で制作することを楽しみ、絵画などを鑑賞して豊かな感性を育てること」ではないだろうか、この講座を通して考えるようになった。

* この講座で学んで最重要と思ったと同時に心に響いたのは「子どもの思いが伝わってくる作品がよい作品なのである」というフレーズだった。

私は今までずっと絵が苦手で、絵の得意な子、上手な子の作品がとても素晴らしいものに見え、自分にはとうてい描けないという劣等感を抱いていた。しかし、今回本当に感じたのは、技法だけで判断するのではなく、どれだけ思いが込められているのかも、絵を評価する際の立派な判断材料ということである。

子どもの気持ちを汲み取れない先生にはなりたくない、と誰だって思う。私ももちろんその1人である。だからこそ絵からも、絵に限らず作文や彼らの言葉からも、一つ一つの言動から気持ちを汲み取る大切さが重要だと感じた。

* 「表現力は描写力だけでなく、着想力も含む」ということが、とても重要だと私は思った。

子どもが図工を嫌いになる理由の一つは「絵を描くのが苦手」ということもあると思う。小・中学校の頃、「どうせ上手に描けないから描かんでいい」と言って、授業自体を真面目に受けていない友人がいた。今、思えば、自分の気持ちをうまく表現できないことが悔しかったのだと思う。

描写だけでなく多様な表現を習っていれば、表現する方法は絵を描くことだけではないと気付いていたかもしれない。「やまなし」で紹介されたいろいろな技法は、描写力がなくても意欲的に取り組むことができるものだと思う。もし教師になることができれば、ぜひ使ってみてみたいと思った。

* 私は絵を描くのが苦手です、ずっと図工とか美術が嫌いでした。それは、何をどう描いていいのかわから

ないし、色の塗り方もどう塗っていいか、どんな塗り方の技法があるのか、適しているのか全く分かりませんでした。だから私は、参考作品の提示が最も重要と思います。

参考作品を見ることで、仕上がりの見通しを持つことや知らなかった技法を知ることができるし、いいなと感じる部分を見つけることができるからです。

* 私が図工指導について重要だと思うのは、「複数教材」である。あまりレベルが高すぎるものを提示すべきでないことは全くその通りだと思った。

私は、子どもの頃、版画の授業でプロの人がつくったものを見せられたとき、「できるわけない」と、気分が下がった。図工がコンプレックスな子どもは、なおさら心が離れていってしまうので、これは重要だと思う。

* この講座では、実践を伴った授業がなされていました。それは、自由な発想で作品をつくる場を設け、できた作品を鑑賞することによって他者の個性を受け入れ、新たな感性を育むという実践です。個性を引き出すよい方法だと思いました。

また、製作のねらいが毎回提示されるので、作品をつくる時に取り組みやすかったです。この実践から、ねらいを提示することで、子どもに目的意識を持たせ、製作に集中させることができると実感しました。この二つの実践が、私の学びにつながりました。

* 対象物に限りなく似せて絵を描くことが重要だと思っていた自分にとって「絵心」が重要だと知って、本当に今までの概念が崩れて、今後もこの考えを抱いて教師になりたいとすることができるようになったから、このことが私にとって一番重要なことであった。

* 私が重要だと思ったのは、参考作品の見せ方です。自分も知らないうちに図工の授業で参考作品を見て、工夫の仕方や表現の仕方を学んでいたことに気がきました。

図工が苦手な子はもちろんいるけれど、やはりどこかで楽しみにしている教科だと思います。参考作品を見せることで、自分もできるのではないかという安心感と自信がつかます。そのように思わせる参考作品を選んで、見せることが大切だと思いました。

* 感想画制作の際には、その子どもの心情を一番大切にすべきだということが重要である。

私は絵を描くことが、あまり得意ではない。小学生のときの図画工作の読書感想画制作の際に、色の塗り方、色の混ぜ方を注意深く指導された。絵を描くことが苦手だった私は、さらに絵に対して苦手意識を持つようになってしまった。だから私は、子どもの心情を大切にしたい。

将来、小学校の先生となり、図画工作を指導するときには、子どもたちに「楽しい」「もっと工夫したい」と思ってもらえるような授業づくりをしていきたいと思う。

* 私はこの講座で、如何に子どもの表現力を伸ばすことのできる授業を考えられるかが最も重要であると思いました。様々な図工授業の形を学びましたが、全てに子どもたちの持つ想像力、表現力を生かす指導の工夫が感じられたからです。道具の使い方だったり参考作品の提示の仕方だったり一緒に悩んだり、教師が子どもの表現力を伸ばすためにできることはいくらでもあることを教わりました。

子どもたちにさせて、「子ども」たちの作品をつくることのできるよう、先生は手助けをしなければならないのだと、この講座で強く感じました。